ヤスパースにおける精神医学から哲学への自己啓蒙的展開

桝　井　靖　之

Ⅰ　はじめに

ヤスパースは，精神医学研究・精神病理学研究（以下，「精神医学研究」と略す）[1] から哲学研究へと転じた経歴で知られる。拙稿「カール・ヤスパースと人間学的構想」[2] では，その経緯を彼の自伝などから考察し，彼にある「人間学的構想」こそが彼に精神医学研究の中で科学の限界と哲学の可能性とを自己啓蒙的に確信させ，哲学研究をも課題とさせたことを読み解いた。しかも彼は，職業上哲学研究へと転じ集中し，その構想にあって，精神医学研究で確信・獲得した人間存在解明上の視点をさらに哲学研究に転じて哲学的に考察した故に，同時代の哲学者とは一線を画す独自の哲学を展開・構築しえたことを指摘した。また転じ後も精神医学研究を継続していた故に「精神医学者兼哲学者」であったことも明らかにした。そしてさらに彼は，精神医学者であり，哲学者であったのみならず，両者が密接に影響し関係し合いつつ哲学者として大成していった故に，彼は人間学的構想に立った「精神医学的哲学者」であったと考えた。

しかし翻って一般には，彼の精神医学研究とその後の彼の哲学との関係は研究分野上無関係なものとして無視または軽視されている。また日本のヤスパース研究さらに通説において，ヤスパースの精神医学研究は，哲学研究者へ転じた経緯とも無関係なものとして扱われてきた。つまりその転じは，概して精神医学研究時代における社会学者ヴェーバーや哲学者キルケゴールらとの直接的・間接的な出会いに刺激され，哲学研究を深めるにいたったことに端を発していると言われるわけだ。転じに関する研究者らの諸説は，独自の観点もあり大同小異の観も拭えないが，概ねその説に沿っている。しかしそのような説明だけでは，学的方向転換という研究上の一大決意に関する理由づけとしては物足りなさが残る。特にこの素人の如き新米哲学者によるその後の堰を切ったかのような精力的な哲学的著作の執筆活動，さらにはそこにある独創的な実存哲学構築を考慮に入れるならば，単に他の学者からの哲学的刺激のみならず，自らの精神医学研究の中においても某かの哲学研究に展開すべき哲学的内容を確信し，その展開のために哲学研究へと転じたという推測もできる。

したがって本稿では，まずその転じに対する日本のヤスパース哲学研究者らの諸説を総合的に考察・検討し，そこからその真相についての糸口をたぐり寄せてみたい。ヤスパース哲学研

1）ヤスパースは，精神病理学者として著名である。しかし経歴により明らかとなるように，彼はハイデルベルク大学精神科クリニックにて無給助手として，精神科医として診察に当たりつつ精神医学研究・精神病理学研究を行った。したがって，彼を単に精神病理学研究を行った精神病理学者だとしてしまうとその分野だけの研究をしていたような誤解を生む。したがって，まずは精神医学研究に専念しそこから精神病理学研究に研究を深め，また医師として精神科医として患者を診断していたことも理解したい。

2）桝井靖之「カール・ヤスパースと人間学的構想」『経済論叢』第176巻第5・6号，2005年11・12月，38-59ページ。

究者の諸説を総合的に考察することにより，各々に当たっただけでは見過ごされてしまうヤスパースにある不可解なその歩みの真相を探る糸口が与えられると考えるからである。そして最後に，彼の精神医学研究時代の歩みと転じの経緯についての自説とそれら諸説（ひいては通説）とを照らし合わせて考察し，示唆に富む諸説を補う自説の可能性とその意義を明らかにしたい。

したがってまずは，そのような観点から，ヤスパースの精神医学研究から哲学研究への転じの経緯に関する代表的な説明を，著名なヤスパース研究者である草薙正夫『ヤスパース哲学入門』（以文社），林田新二『ヤスパースの実存哲学』（弘文堂），そして三つの思想家・哲学者の入門書シリーズ，つまりは小倉志祥他訳著『世界の名著13ヤスパース・マルセル』（中央公論社），重田英世『人類の知的遺産71ヤスパース』（講談社），宇都宮芳明『センチュリーブックス・人と思想36ヤスパース』（清水書院）から考察したい。なお，転じの経緯についての考察上，入門書を取り上げることになるが，いずれも日本を代表する著名な研究者である故に了解されよう。

Ⅱ　精神医学研究時代から哲学研究時代への転じに関する先行研究

1　草薙正夫

草薙正夫は，日本のヤスパース研究の第一人者と言える。草薙は著書『ヤスパース哲学入門』においてヤスパースの大学時代を次のように考察する。すなわち「1901年かれはミュンヘン大学に入学した。かれはその当時から哲学に対して深い関心をもち，高い価値を認めていたが，哲学を専門に勉強して，哲学の教師になろうなどという気は少しもなかった。専門の哲学者になろうという決意は，専門の詩人になろうという決意と同様に，全くばかげたことだと，かれには思えたからである。むしろかれは，自分の本来の使命は，実際的な生活にあると考えて，弁護士になる目的で法律を学んだ」[3] と。しかも彼は，第三学期が終わると共に，法学から医学に専攻を変更した。そのことに関して，草薙は，「かれが医学を選んだというのは，この告白の中にもあらわれているように，かれが何よりも重大視したことは，現実を経験し，知るということであった。かれは哲学書や文学書を読み，美術鑑賞に耽ったりしたが，これらのものは本当にかれを満足させなかった。それというのは，これらのものは，単なる理論的なものであるか，ないしは非現実的なものであるかのどちらかであって，それらによっては，人間は本当に生きているとはいえないと思えたからであった。その当時，現実とは，かれにとっては，単に何らかの技術を身につけて，この世の中で実際生活を営むことを意味していたにすぎないけれども，もっぱら現実性に心をひかれるというこのようなかれの精神的態度こそ，後年かれをして，抽象的な合理主義的哲学に反対させ，哲学を実践として捉えるところの実存哲学へと駆り立てた大きな原動力となったものといってよいだろう」[4] と言う。

また1907年，ヤスパースは未来の伴侶となるゲルトルート・マイヤーと出会うが，それは彼の生涯において決定的な意義をもつものであった。草薙は，彼自身がこの出会いについて論文「私の哲学への道」の中で，「世界が変化し，研究の成果があがった。たえず私を脅かしていた懐疑から生まれ変わったように，《哲学すること》が，無制約なそして不可解な決断によって真剣さを獲得した。この決断は，生ける限り，それなくば単なる思想が非本質的であるところの交わりを可能にしたものである」[5] と

3）草薙正夫『ヤスパース哲学入門』以文社，1973年，14–15ページ。

4）同上書，16ページ。

5）同上書，16ページ。

述べていることに注意を向け引用している。

次に草薙は，「1908年から15年までの七年間，かれはハイデルベルクで，精神病理学の臨床教室の主任教授ニッスルのもとで助手として，精神病理学の研究に従事した。1909年には学位を取得し，1913年に哲学部心理学講師に就任した。その間かれは師のニッスルを初めとして，フッセル，ディルタイ，マックス・ウェーバー等から大きい影響を受けた。この影響は，しかし思想上の内容に関するものでなくして，主として研究方法に関するものであった。それによってかれの学問的研究の目標が明確になってきた。すなわちそれは，『われわれは何を知るか』，『何によって，またいかにして知るか』『われわれに知られないものは何であるか』などということを知ることであった。換言すると，かれはある一つの研究可能な対象が，いかなる仕方で現象するかということを洞察するところの，方法論的課題と取り組んだのである」[6]と言う。また草薙は，ヤスパースの「方法的考察の特色は，内容から遊離した，単なる方法的研究それ自体ではないということである。それは認識を獲得させた方法の手引きによって，認識を発展させ，組織づけること，認識のはたらきを認識し，同時にそれによって事物を明らかにすることである。かれにとっては，あらゆる方法は，それの現実の内容によってのみ価値をもつのだから，方法が実際的な認識をもたらさないかぎり，方法的研究は意義をもたない」[7]と言う。

そして草薙は，1913年に衝撃を受けたキルケゴール哲学についてヤスパース自身が，「かれの作品は，私を独特の意識的，方法的な思惟としての哲学へ決定的に目覚めさせた。いろいろな見解を参考として，昔の哲学を再獲得するという課題が，このとき打ち建てられた」[8]と述べていることに注目する。そして草薙は，「キルケゴールとの出会いによって，かれの哲学への道において，実存哲学への目標が，微かではあるとしても，光のうちに浮かび上がってきたのである。それと同時に，かれの独力による本格的な哲学の勉強が始まった。かくしてカントやシェリングやプロティノス等の過去の偉大な哲学者たちが，かれにとって独自の新しい意義

＊草薙は，原書では，論文集*Rechenschaft und Ausblick*に論文として収められている，1951年にヤスパースが行ったラジオ講演*Mein Weg zur Philosophie*を「私の哲学への道」と訳し，ここでそこから直接自身で邦訳し引用している。

しかし邦訳では，『哲学への道』という本の中に「哲学への私の道」として訳され収められている。

＊草薙が引用した際に用いた訳は，次の邦訳本の訳と下線部分等の訳が少し異なってはいるが問題はない。

「世界が変化し，研究の成果が上がりました。たえず私を脅かしていた懐疑から生まれ変わったように，哲学することが，無制約的で根拠づけられない決断を経験することによって，真剣さを獲得しました。この決断は，それなしには単なる思想が非本質的なものに留まるような交わりを，生涯可能にしたものであります。」

【Karl Jaspers, *Rechenschaft und Ausblick*, München, R. Piper & Co. Verlag, 1951, S. 329.（草薙正夫・林田新二他訳「哲学への私の道」『哲学への道』以文社，1980年17ページ）。】以下，RuAと略記。

6）同上書，17ページ。

7）同上書，17ページ。

8）同上書，18ページ。

＊草薙が引用した際に用いた訳は，次の邦訳本の訳と下線部分等の訳が少し異なってはいるが問題はない。

「彼の著作は，独特の根拠をもった意識的方法的な思惟としての哲学に私を決定的に目覚めさせました。もろもろの参考可能な見解を貫いて認められる過去の哲学の真の内実を再獲得するという課題が，このとき打ち建てられたのです。」

【RuA, S. 330.（邦訳「哲学への私の道」17ページ）。】

をもって再び生きてきた」[9] と言う。それと共に彼が，1914年第一次大戦を病弱故に兵役をまぬかれたため，「静かにしかし限界状況を見つめながら，妻とともに幸福な哲学の勉強と思索を続けることができた」[10] ことも草薙は指摘する。

また草薙は，1919年に刊行されたヤスパースの著書『世界観の心理学』は「こうしたかれの哲学の勉強の成果として実を結んだかれの最初の哲学的著作」[11] だと言う。しかし草薙は，彼自身は「この著作において，哲学を提示する意図はなかったといっている」[12] と『哲学的自伝』から指摘する。というのは草薙によれば，彼にとっては「哲学は最高の意義において，予言的哲学を意味していたのに対して，かれの著書は，単に世界観のあらゆる可能性を考察して，それを理解することを，その課題とするものだからである。……それにもかかわらず，この書物は，無意識的にかれの哲学への道となったという意味で，かれの最初の哲学的著作といってよい」[13] と言われる。つまりは，あらゆる哲学上の根本的な問いがこの書に含まれているからだ。すなわち，「人間に対して存在している世界についての問い，人間の状況と人間がそれから離脱することのできない人間の限界状況（死・苦悩・偶然・責罪・闘争）についての問い，時間とその意義の多元性についての問い，自己生産としての自由の運動についての問い，実存についての問い，ニヒリズムと逃避についての問い，現実的なものや真なるものの開顕としての愛についての問い，神秘主義の道と理念の道についての問い，等々である」[14]。確かに草薙の指摘する通り彼自身もまた，「この書物は歴史的に見るならば，後になって現代実存哲学と呼ばれるものの最初の著作である」[15] と言い，また「私の心理学は，その領域の広さにおいて――私は意識していなかったにもかかわらず，後に私が《実存開明》（Existenzerhellung）と名づけたところのものと同じ性格をもっていた」[16] と言う。

さらに草薙は，重要なことは「この著述を通じてヤスパース自身が，かれの哲学の根本的性格を決定するものだといってもさしつかえないような重要なことを，意識したということである。それは，第一に本来的に哲学ではあるが，予言的哲学ではないという，一種の哲学の課題が存在するということと，第二に科学的心理学と呼ばれるところの心理学と，それ自体すでに哲学であるところの心理学との区別の発見であ

9）同上書，18-19ページ。

10）同上書，19ページ。

11）同上書，19ページ。

12）同上書，19ページ。

＊草薙が引用した際に用いた訳は，次の邦訳本の訳と少し異なってはいるが問題はない。

「その心理学は何ら哲学を持ち出そうとするものではない，……」

【Karl Jaspers, (Serie Piper 150) *Philoso-phische Autobiographie*, 2. Aufl., München, R. Piper & Co. Verlag, 1977, 1984, S. 32.（重田英世訳『（ヤスパース選集14）哲学的自伝』理想社，1965年，43ページ）。】以下，PAと略記。

13）同上書，19ページ。

14）同上書，20ページ。

15）同上書，20ページ。

＊草薙が引用した際に用いた訳は，次の邦訳本の訳と下線部分等の訳が少し異なってはいるが問題はない。

「〈世界観の心理学〉は歴史的に回顧してみますと，後になっていわゆる現代実存哲学と呼ばれるに至ったものの最も早期の著作であります。」

【PA, S. 33.（邦訳45ページ）。】

16）同上書，20ページ。

＊草薙が引用した際に用いた訳は，次の邦訳本の訳と少し異なってはいるが問題はない。

「私の心理学は，――私は意識していなかったにもかかわらず――後に私が《実存開明》Existenzerhellungと名づけた哲学と，広い範囲で同じ性格をもっていました。」

【RuA, S. 334-335.（邦訳「私の哲学について」23ページ）。】

る。この二つの発見が，かれの哲学の重要な根本的性格を決定したというのは，第一の発見によって，かれはみずから一つの哲学を産み出すことでなくして，哲学の真の意味を理解し，それを告知するということを，自己の哲学的使命として自覚したからであり，第二の発見は，おそらく生の哲学としてのディルタイの了解心理学からの影響があってのことと思われるが，われわれはそこに，かれの哲学を，生の哲学から実存哲学への発展の歩みとして捉えることができるからである」[17] と言う。

2　林田新二

次に林田は，著書『ヤスパースの実存哲学』(1971年）においてヤスパースの実存哲学について論じている。したがって林田は，その本論の前に彼の歩みについて少し触れるにとどまる。しかし林田は，その中で彼が精神医学研究において科学の可能性と限界に突き当たり，そこから哲学の可能性を見出したと重要な指摘をしている。つまり林田は，「一時期，医学の研究に没頭し，その研究者としての人生を精神病理学の分野で歩みはじめたヤスパースにとって，また社会科学・文化科学の没価値性を厳密に保とうとしたM・ヴェーバーとの交わりの中で自己の思想を深化していったヤスパースにとって，科学的認識の確実さの尊重されるべきことは自明のことであった。しかしまた，精神病理学や心理学の領域から哲学へと移らざるをえない内的必然性を蔵したヤスパースの問題関心にあって，科学的真理が，真理のすべてであるとみなされえないこともまた自明のことであった。かくて，ヤスパースは，科学にそれなりの意義を承認しつつ科学的認識を前提としはするけれども，それにつきることのない真理を追究するものとして，すなわち，科学をこえ包むものとして哲学を考える。彼は，反科学的立場に立つのでもなければ，科学と同一次元での真理を問おうとするのでもない。彼の『哲学的思考』とは，『科学に反するのではなく……超越学ではない』が，しかし科学とは『根源的に異なる思考』(「自伝」・『世界』316～319)[18] であった。今日の精神的不幸の一つの要素が，不明瞭な学問思想の支配にあるとして，『哲学と学問，思惟のあり方と認識のあり方との関係を明晰にすることが，決して充足されることのない哲学の課題である。』(「哲学の課題」『世界』[19] とされている」[20] と言う。

17）同上書，20–21ページ。

18）＊林田は，以下の文章の中の下線部から部分的に引用している

「しかもこれに劣らず重要なことは，科学に反するのではなく，つねに科学と提携しつつ，超科学に堕さず，意図からして丸っきり異なる思惟を遂行する哲学的思惟というものを，科学とは別なものとして純粋に引き立たせることであります。」

【PA, S. 45.（邦訳65ページ)。】

＊林田は，『世界と哲学』(Karl Jaspers, *Philosophie und Welt. Reden und Aufsätze*, München, R. Piper & Co. Verlag, 1958）に収められている「哲学的自伝」から引用している。それは，『哲学的自伝』として独立して今日出版され，また邦訳本もある。したがって本稿においては，そこから引用箇所を引いている。

19）＊林田が引用した際に用いた訳は，次の邦訳本の訳と少し異なっている。特にWissenschaftを「学問」と訳すか，「科学」と訳すかで意味が異なってくるように思われる。

「哲学と科学（Wissenschaft）の関係を，換言すると，一般的にいって思惟と認識の方法を，明確にするということが，今日の哲学の重要な課題――それは少しも実現されていないのであるが――である。」

【Karl Jaspers, *Philosophie und Welt. Reden und Aufsätze*, München, R. Piper & Co. Verlag, 1958, S. 18–19.（草薙正夫・重田英世他訳「現代における哲学の課題」『(ヤスパース選集24）哲学と世界』理想社，1968年，19ページ)。】

20）林田新二『ヤスパースの実存哲学』弘文堂，1971年，20–21ページ。

したがって，ヤスパースは「精神病理学者としてすでに，科学の限界を明確に自覚していた。『精神病理学者の限界とは，個々の人間を心理学的諸概念に解きほぐしつくすことが決してできないというところにある』（『総論』1，邦訳・上巻2）[21]として，『精神病理学総論の限界』の指摘から，叙述をはじめている。『人間の心は無限に包括するもの（ein unendlich Umgreifendes)』[22]だからである。同書において，彼が了解心理学の明証性を与えたと解される場合でも，彼が『了解は至るところに限界をもつ』ことを明言しており，その限界の突破のために，彼は『精神的了解』から『実存開明』へと移行することになるという事実が指摘される」[23]と林田は言う。以上のように林田の考察において，ヤスパースの精神医学研究時代は，科学の限界を知る上で有益な時期であったと指摘されている。また，「すでに精神病理学者としてすぐれた研究業績をあげていた彼が，新たに哲学を職業としてひきうけるという困難な道を決断したのは，決して客観的な哲学についての知を伝授するためではなくて，M・ウェーバーなきあと，〈哲学すること〉を万人に要請するためであったと回想されている」[24]と林田は指摘している。

3　小倉志祥

『世界の名著ヤスパース・マルセル』において，小倉志祥はヤスパースの解説を担当している。当然入門書という性格上，小倉はそこにおいてヤスパースの研究者としての歩みとその哲学について分かりやすくまとめ論じている。小倉は，そこにおいてヤスパースの精神医学者から哲学者への転身を以下のように記している。

小倉は，ヤスパースのジルス・マリーア（Sils-Maria）での心理学者への道を歩む将来への決意と展望にまず触れている[25]。そして次に小倉は，1909年には「かのクレペリンの後継者ニッスル教授のもとで論文『郷愁と犯罪』によって医学の学位を取得し，これによって10年には，精神科研究助手に任ぜられ，さらに13年秋には大著『精神病理学総論』によって名声を博し，それでもって当時のハイデルベルク大学哲学主任教授ヴィンデルバントのもとで心理学の教授資格を取得し，14年の夏学期

21）「精神病理学者の限界とは，個々の人間を心理学的諸概念に解きほぐしつくすことが決してできないというところにある。」

【Karl Jaspers, *Allgemeine Psychopathologie*, fuenfte Auflage, Berlin, Julius Springer, 1948, S. 1.（内村祐之他訳『精神病理学総論上巻』1953年，2ページ)。】以下，APと略記。

【AP, ersten Auflage, Berlin, Julius Springer, 1913, S. 1.（西丸四方訳『精神病理学原論』創元社，1971年，14ページ)。】

＊ヤスパース『精神病理学原論』は，1913年に出版されたが，その後何度も書き加えられ，第9版まで出版されることとなる。日本語訳においては，初版本が『精神病理学原論』，第5版が『精神病理学総論』とタイトルをかえて出版されている。

そしてここで林田は，後者の第5版の邦訳本を参照しているが，初版においても，林田の引用箇所が見出される。したがって上記のようにその個所もあげておいた。

日本を代表する優れたヤスパース研究者である林田においても，この『精神病理学原論』の初版と第5版との比較検討がなされていない。ここにおいても，彼の精神病理学がヤスパース哲学研究において軽視されていることが窺い知れよう。

22）この引用箇所は，以下のように，第5版にはあるが初版にはない。

「人間の心は無限に包括するもので，……」

【AP, fünfte Auflage, 1948, S. 6.（邦訳，上巻，9ページ)。】

23）林田新二，前掲書，22ページ。

24）林田新二，前掲書，5ページ。

25）つまり小倉は，「ニーチェゆかりの地ジルス・マリアで将来計画についての意見書を草して父に示そうとした」【小倉志祥・山本信他訳著『世界の名著ヤスパース・マルセル』中央公論，1976年，10ページ。】と言う。

からは私講師としてまず性格心理学および能力心理学のテーマで心理学を開講し，16年には精神病理学助教授に就任する。心理学講義はその後，しだいに幅をひろげ了解心理学の視点のもとで社会心理学や民族心理学また道徳心理学や宗教心理学をも包含するようになる。その成果が19年に公にした名著『世界観の心理学』であり，これによってヤスパースはしだいに哲学者としても認められるようになる。実際，ヤスパース自身もこの著書がことさらに意図せずして『哲学への私の道』となったと述懐している」[26] と言う。また続けて「彼は『世界観の心理学』の意図を繰り返しアリストテレスの『霊魂はある意味ですべての存在者である』という命題に結びつけ，これの活用であるとみなしている。この命題によれば，すべての存在者が心理学的考察の対象となりうるのであり，霊魂の主体としての人間もしかりということになる。かくして心理学が人間考察のための哲学への道となるのである」[27] と言う。

また小倉は，ヤスパース著『私の哲学について』から草薙の引用と重複するが以下の文章を引用する。「私の心理学は私の意識しないうちに広い範囲にわたって，私が後に『実存開明』と名づけたものの性格を受け入れた。この心理学はもはや単に事実と出来事の規則との経験的な確認ではなく霊魂の諸可能性の企画であり，これらの可能性は鏡に映すように，人間は何でありうるのか，人間に何ができるか，人間はどこへ到りうるか，これを示すものである。かかる洞察は，私が本来的に意志するものを内的行為において選択するための自由への訴えかけを意味している」[28] と。その引用に続けて彼は，「このようにヤスパースは『実存開明』の哲学の出発点を『世界観の心理学』に置こうとしている。実際，この時期に彼の哲学の素材は整ったのである。……14年から18年にかけては第一次世界大戦の不幸が介在しているが，この頃までにヤスパースの生涯と思想にとって重要なる人物との出会いもほぼ実現した。」[29] と言う。つまり思想上重要な経験と出会いとは，第一次世界大戦の悲惨の中での「限界状況」の感受，1913年に初めて読んだキルケゴール，1909年に知り会ったヴェーバー，1913年にゲッチンゲンで個人的に会ったフッサールである[30]。

以上のように小倉においてもまた，草薙と同様にヤスパースは『世界観の心理学』によって哲学者として認められ，それ故この書こそが彼の実存哲学の出発点となった。がさらに小倉は，ヤスパースにおいて人間心理の問題が霊魂の問題，ひいては形而上学，哲学の問題へと発展していくことを指摘する。

4　重田英世

重田英世もまた，入門書『人類の知的遺産ヤスパース』において，ヤスパースの哲学への歩みおよびヤスパース哲学について詳細にまとめ

26）小倉志祥・山本信他訳著『世界の名著ヤスパース・マルセル』中央公論，1976年，10-11ページ。

27）同上書，11ページ。

28）同上書，11ページ。

＊小倉が引用した際に用いた訳は，次の邦訳本の訳と少し異なってはいるが問題はない。

「私の心理学は，――私は意識していなかったにもかかわらず――後に私が《実存開明》Existenzerhellungと名づけた哲学と，広い範囲で同じ性格をもっていました。

すなわちこの心理学は，もはや単に生起の事実や法則を経験的に確定するものではなくて，人間とは何であるのか，人間には何が達成されるか，人間はどうなりうるのかということを映し出している魂の，いろいろな可能性を描いてみせることであったのです。このような洞察は，私が本来的に欲するものを内的行為において選ぶための自由への訴えという意味をもっているのであります。」

【RuA, S. 334-335.（邦訳「私の哲学について」23ページ）。】

29）同上書，11ページ。

30）同上書，12-13ページ。

論じている。重田は，彼が実存哲学へと目覚めていく道のりを以下のように引用する。すなわち彼が，「1913年キルケゴールを知って強烈な影響を受けたのは周知である。ヤスパース研究の諸家はこぞってこの点を強調する。萌芽の状態で睡(まどろ)み混沌としていたヤスパースの原体験は，キルケゴールの『実存』を知って，明確な形を整え，受肉もしたに違いない。アルトゥル・ヒュブシャーは，ヤスパースがキルケゴールを知ったという理由で，1913年を『実存哲学のひそかな誕生の年』とさえ規定している。

しかし実存の原体験で先述した通り，キルケゴールを知って初めてヤスパースの実存が覚醒したと誤解されてはならない。全く同質の体験が完全に先行確立されていたことは歴然としており，だからこそ激しい共鳴を呼び起こしえたのである。

『私は突如として，そもそも私が存在していることに愕然とした』（1904年日記）。『無明の闇から個々の人間は一段一段，彼の実存の意識へと登ってゆく』（05年日記）。『そもそも死は何を意味するか，個性が何を意味するか』（05年書簡）。『常に死を憶い起こせmemento moriの命令に耳を傾けるべきであり』（04年書簡），「われわれはまさしくいつでも限界に立っている」（05年書簡）。『全体状況』を熟考すると『真にただ真摯な心のみを正しいものとして見いだしうる』（04年書簡）。こうした『哲学が開明せねばならなかった空間』――現存在，実存，超越者，限界状況，交わり，挫折，真摯さ等――は，キルケゴールを知る以前から，問題として把握され，体験されていたことがわかる。『実存哲学のひそかな誕生』は『世界観の心理学』『精神病理学総論』よりずっと以前にすんでおり，強いていえば1913年以降は急成長期に入ったというのが妥当であろう」[31]と。彼は，難病，気管支拡張症と二次的心不全（Bronchiektasen und sekun-daere Herzinsuffizienz）を抱えていた。確かに重田は，1906年，1907年の彼の日記から，1913年以降の当時の限界状況下での哲学研究への強い思いも紹介している。たとえば，「『前夜私は生々しい夢を見た。それは今日一日中私の気分を支配した。私は触診により自分の腹部に多数の結節を触知し，それらが網膜全体に広がっているのを認めた。フェルカー医師のもとへ行く。診断，網膜転位を伴った後腹膜肉腫，手術不可能。フェルカー博士が全く冷静に何でもないことを言明したように，来年以内に死は確実――私は強い衝撃を受け，ほとんど軀が呑み込まれてしまうように感じたが，しかし何ら不安をもたなかった。両親のところへ行って話を告げた。二人は全く冷静であったが，このことを私は全く有難いと受け取った。よろしい，もはや医学研究は何ら目的ではない。今から私はひたすら哲学だけを追求せねばならなぬ。このことが非常に嬉しかったので，私には肉腫のことが早くも記憶から失せてしまった。』（〇七・二・二）」[32]と。

しかも重田は，「こうした限界状況の体験は，先述した実存―形而上学的な原体験など一撃で蹂躙してしまうかのようである。しかし原体験は，限界状況の体験と相即しつつ，瞑想により繰り返し自己を回復し確認する。こうしてそれは次第に確固たるものになってゆく。ヤスパース哲学の礎石はこうして，ギムナジウムのプリマの二年間と学生時代に，ほぼでき上がっていたものと見られうる。さらにその基盤を求めれば，父母の情操教育と歴史的風土に囲まれた幼少年時代の体験が浮かび上がってくる。それゆえ1913年キルケゴールを知ってからとか，第一次大戦勃発による深刻な衝撃とかを機として，ヤスパースの実存思想が生まれたとする意見を私はとらない。はるか以前から下地ができ

31）重田英世『人類の知的遺産ヤスパース』講談社，1982年，156-157ページ。

32）同上書，134ページ。

上がっていたからこそ，キルケゴールと深く呼応しえたのである」[33] と言う。また重田は，さらにヤスパース著・重田訳『カント』の「解説にかえて」の中で，「ヤスパースは哲学や医学を大学で学ぶ以前に，ギムナジウム時代に孤独のうちにスピノザを始めとして一群の形而上家に親しむ機会があった。この時代の印象や感激が，彼の哲学観や哲学史観の基調を決定したものと思われる」[34] と指摘する。以上のように重田は，独自に実存哲学の始まりを『世界観の心理学』や『精神病理学総論』よりもさらに以前の限界状況下の苦悩と「実存の原体験」の内に見る必要があると考える。それは非常に重要な指摘であろう。

ではその実存の原体験とは何か。重田は，ヤスパースが自らの体験を著作の中にさりげなく引用することを考えるとそれは明記されているわけではないが，その実存の原体験の内容もまたどこかに記されているのではないかと考える。すなわち重田は，前掲書『人類の知的遺産ヤスパース』の中で，「ヤスパースの原体験のさりげない記述を『世界観の心理学』(1919年・441ページ）に見いだしうると信ずるものである」[35] と言う。そして重田は，「私たちは北海のほとりを散歩していた。浜と海と砂丘以外にまわりに人影はない。私たちは砂に横たわる。時は過ぎ去るが，ほとんどはそれと気付かれない。一方，海は幾マイルにも浜に沿って，静かにたえず打ち寄せている。雲は行く。風を受けて砂は烏麦の間をさらさらと流れる。多分私たちは，無時間的に存在しているかのような気分なのである。一切は私たちにとって一つの永遠の故郷のように親しげである。まるで，親近性や一体性の遠い漠たる記憶が，私たちに喚びさまされるかのようである……あたかも私たちが，われわれ自身であるところの自然と合流しているかのようである」[36] という彼の体験にそれを見出す。「砂丘・烏麦・海・鷗（かもめ）は暗号文字と化し，それらを介して超越者と実存とが一挙に成立している意識状態――これをヤスパースは神秘的なものと呼んだのであるが，のちの絶対意識であり，存在意識の充実である」[37] と言う。そして「先に描写した北海海岸での散歩の体験が，ヤスパースの実存の原体験であり，一過的心理状態ではなく，重要な形而上学的瞑想の意義を有していたとする著者の想定の裏付けは，のちの主著『哲学Ⅲ形而上学』中の暗号解読の章の自然の暗号存在の項において，『自然への愛』『私がその中に生まれ，その中で私を洗練してくれたところの自然の近しさ』『私の魂の風景』，そして『北海海岸』が語られているのを見れば歴然とする」[38] と言う。それではその「実存の原体験」とはいつ起こったのか。重田は，資料から推測するしかないが，「ギムナジウムのプリマの最後の二年間のうち，17歳の時，例の組合非加入問題での屈辱と孤独に苛まれ，傷心を懐いて，母方の祖母（祖父はすでに死）のもとを訪れた折のいつかであろう。してみると1900年頃ということになる」[39] と言う。

また重田は，「開かれた体系性を具えながら，なおかつ一種の凌駕しがたい徹底的完結性をもつ――この性格が『病理学』以来ヤスパース哲学全体を貫く性格であり，そしてまた，ヤスパース思想を受け継いで，さらに展開するとか凌駕するとかが容易でない理由なのである」[40] と言う。ここにおいて彼は『精神病理学総論』をヤスパース哲学の内に入れている。しかし重

33）同上書，135ページ。
34）重田英世「解説にかえて」（ヤスパース著・重田英世訳『ヤスパース選集8カント』理想社，1962年），442ページ。
35）重田英世，前掲書，124ページ。
36）同上書，126ページ。
37）同上書，127ページ。
38）同上書，127-128ページ。
39）同上書，129ページ。
40）同上書，361ページ。

田は，この著書の「第二部ヤスパースの生涯と思想形成・五章医学時代・二節若き医師」で，『精神病理学総論』の解説に約4ページを割いているにもかかわらず，ヤスパースの哲学的要素をこの著書から読み取らない。すなわち重田は，「『精神病理学総論』は，当時の混沌とした精神病理学の世界に方法意識を導入して，初めて学としての精神病理学を可能にしたものとして，弱冠三〇歳の著者は一躍学界を瞠目せしめたが，彼自身は一九一五年まで無給医のまま，クリニックに籍を置くのである」[41] と言う。また重田は，「医学生の忙しい時期にも，夕食後の時間を努めて医学から離れ，哲学や文学へ割いていたヤスパースであるが（もちろん十分打ち込めぬことを嘆いているが），無給助手時代になると，医学と並んで哲学研究はいよいよ増強された。ラスクのカントゼミナールに出たり，ヴィンデルバントを聴講した。その間ディルタイの『記述的分析的心理学』やフッサールの初期『現象学』を自家薬籠中のものとしていたがゆえに，精神病理学から了解心理学まで，自己の地歩を強固になしえた。初期の精神医学論文中に登場する専門学者・心理学者を別として，哲学者・文学者・芸術家・社会学者・歴史家等は，いちいち列挙の暇はないがはなはだ多彩で，当時のヤスパースの豊かな精神領域を覗い知ることができる」[42] と言うのみである。

つまり重田によれば，彼はディルタイやフッサールの哲学を自家薬籠中のものとし，それを自らの精神病理学，了解心理学に用いたと言われる。確かにその指摘は正しかろう。しかしそれだけでは，そこに彼独自の実存哲学へとつながっていく哲学的展開の萌芽はなかったことになる。したがって実存哲学の始まりを『世界観の心理学』や『精神病理学総論』よりもさらに以前の限界状況下の苦悩と「実存の原体験」に読み取る重田においても，『精神病理学総論』にそのような意味でのヤスパース哲学の要素は見出されてはいないと言えよう。

5　宇都宮芳明

『精神病理学総論』の意図については，宇都宮芳明は以下のように述べている。

「当時のドイツの精神病学界では，精神病はすべて脳の疾患であるという身体医学の立場が主流を占め，他方に精神病は身体疾患ではなく，まさしく精神，すなわち人格の疾患であるとする狭義での精神医学の立場があったが，ヤスパースはそのどちらをも絶対的立場とは認めなかった。ヤスパースの考えでは，ある一つの立場なり理論なりを固定化し絶対視することは危険で，それはかえってもろもろの事象を歪曲してとらえることになる。諸理論はどこまでも事実解明のためのいわば道具だてであり，事実を事実としてとらえるためには，むしろそれらの諸理論を相対化し，その後でそれらを改めて組織化することが必要である。ヤスパースが『総論』で意図したことは，精神病理現象を全体として解明するための一つの理論や体系を樹立することではなく，個々の現象を現象学的に厳密に記述し，またそれら現象についての既成の諸理論を吟味検討しつつ組織化することであった」[43] と言う。

また宇都宮の次の解説は重要であろう。「ヤスパースは，人間について一つの全体像を与えるような科学的理論を拒否した。このことはまた，当時のヤスパースが科学的精神とは異なった哲学的精神にすでに目ざめていたことを物語るものであろう。同じ科学の道を歩むにしても，もしヤスパースが精神病理学という人間存在に密着した科学の道を選ばなかったら，後日の哲学者ヤスパースは存在しなかったかもしれな

41）同上書，150ページ。
42）同上書，151ページ。
43）宇都宮芳明『人と思想ヤスパース』清水書院，1969年，38ページ。

い。精神病とは何かということを追究していけば，たとえばそこに，では正常な人間とはどのような人間かという問いが当然生じてくる。精神病ではない大多数の人間の平均値がそれだ，という解答が与えられるかもしれない。それでは，その大多数の正常な人間の特性はどこにあるのだろうか。ウィルマンスは，軽妙に，「正常とは軽い精神薄弱である」と定義した。しかしそうなると，もう正常とか異常とかいうことが何だかわからなくなり，正常でないのが異常で，異常でないのが正常であるという，循環論になってしまうであろう。精神病理学者も，その研究の最後の地点で，人間とは何かという哲学的な問いに取り組まざるをえないのである」[44] と。

また宇都宮は，「ハイデッガーもこの『存在と時間』のうちで三たびもヤスパースの『世界観の心理学』に触れ，この書物を『人間とは何か』を深く問う『哲学的傾向』をもつものとして高く評価しているのである」[45] と指摘している。そして宇都宮は，『世界観の心理学』で限界状況などの「走り書きされたこれらの問題は，すべて後のヤスパースの哲学において改めて問いただされ，体系的に仕上げられるのである」[46] と言う。宇都宮もまた『世界観の心理学』に後の彼の実存哲学の萌芽を読み取るのである。しかし宇都宮が，精神医学研究時代の中に「人間とは何か」という哲学的問いが深められていったことに注目する点は重要であろう。

6　伴博

伴博は，ヤスパース哲学研究者としてヤスパースの歩みをうまくまとめている。（以下，資料①「伴博によるヤスパースの三つの時期」参照）

「伴博によるヤスパースにおける三つの時期」（資料①）で注目したいのは，その「初期（一）精神病理学の時期」である。伴は，その時期を「哲学以前の段階」とする。そして「（二）心理学の教員の時期」を「哲学活動の上では，これが初期の模索的な始動の時期に相当する」と言う。それは，これまで述べてきた諸説にある考

資料①　伴博によるヤスパースの三つの時期　【伴博『カントとヤスパース』より】[47]

＊初期 （一）精神病理学の時期。 ハイデルベルク大学精神科クリニックの助手となって翌年に出された学位論文「郷愁と犯罪」（1909年）に始まり，この時期の代表作『精神病理学総論』（初版，1913年）に至る期間にあたる。いわば哲学以前の段階とされよう。 （二）心理学の教員〔講師，後に員外教授〕の時期（1914～1920年）にあたるが，哲学活動の上では，これが初期の模索的な始動の時期に相当するといえよう。この時期の代表作が『世界観の心理学』（1919年）である。
＊中期 彼の哲学思想（その基本思想）の形成期にあたる。M・ウェーバーの死（1920年）が転機となって哲学科に移籍する。以後十年あまりの沈黙ののちに『現代の精神的状況』（1931年）と『哲学』三巻（1932年）を著わし，「ヤスパース哲学」がここに確立される。
＊後期 いわば完成期にあたり，彼の基本思想の仕上げと展開の時期であって，『理性と実存』（1935年）をはじめ，大著『真理について――哲学的論理学第一巻』（1947年），『啓示に面しての哲学的信仰』（1962年）などを含み，その旺盛な活動は没年（1969年）の直前まで至っている。

44）同上書，39ページ。

45）同上書，52–53ページ。

46）同上書，58ページ。

47）伴博『カントとヤスパース』北樹出版，1999年，599–600ページ。

え方をうまくまとめていると言えよう。つまりは，1913年のキルケゴール体験以後の心理学教員の時期（1914年～1920年）から哲学的研究活動が初めて開始されたという認識がそこにはある。

7　諸説の総括

草薙は，ヤスパースが大学時代に専攻を法学から医学に変更したのは，彼が何よりも現実を経験し知ることを重視したからである。そしてそのような態度こそが，彼を後の哲学を実践で捉える実存哲学へと駆り立てたと指摘している。草薙は，彼が大学生当時から哲学に対し高い価値を認めつつも，その一方で自分の使命は実際的な生活にあると考え，哲学を専門に学ぼうとは思わなかったとも指摘している。しかしだからと言って，彼のギムナジウムおよび大学時代の日常生活が哲学と全く無縁であったわけではない。それどころか当時の彼は，極めて哲学的な色彩を帯びた生活を送っていた。その背景には，重田の指摘するように何よりも彼の日常が難病患者であった故に常に死と隣り合わせの苦悩の限界状況下に置かれていたことがあげられよう。またあくまで重田の説ではあるが，先にあげた通りギムナジウム時代の1900年頃，北海海岸での散歩中に彼は「実存の原体験」を体験する。それが，当時の限界状況の体験と相即しつつ確固たるものとなり哲学への渇望を高めて，後の実存哲学の礎石となっていったと重田は考える。一記述を抜き出し，その体験こそが彼の原体験だと特定する重田の先の指摘は推測の域を出ていない。しかしその特定の真偽は別として，ギムナジウム時代の彼自身の限界状況と実存の体験の内にヤスパース哲学の原点を見出す重田の指摘は重要だ。

一方草薙は，ギムナジウム時代や難病の体験の内にヤスパース哲学の源泉を読み取らず，むしろ草薙の場合，ヤスパースが大学院を修了し大学の精神科クリニック無給助手時代にあたる1913年にキルケゴールを知りその実存に深く共鳴したことに注目する。すなわちそこで彼は，哲学へと決定的に目覚め，実存哲学への目標がわずかではあるが光の内に浮かび上がり，そこから本格的な哲学研究を始めたと考えるのだ。この点について重田は，彼にギムナジウム時代の先の「実存の原体験」があればこそ，その後のクリニック無給助手時代のキルケゴール体験が可能となったと考える。したがって結局のところ重田にあっても，実存哲学への本格的な目覚めは，1913年のキルケゴール体験が自らの実存の下地と呼応するまで持ち越されることには変わりがない。

ヤスパースの目論む哲学にあっては，論としての哲学という観点のみならず「哲学すること」という観点からも読み取る必要があることが諸説から理解されよう。つまり草薙は，彼が1907年ゲルトルート・マイヤーと出会うことにおいてより真剣に「哲学すること」になったと言う。他方林田は，彼はヴェーバーの死後「哲学すること」を万人に要求するために精神病理学者から哲学者へと転じる決断を下したと言う。両者の指摘から，彼は普段念頭にあった「哲学すること」の重要性を自らにとってかけがえのない人との出会いと別れを機に一層強く再確認しそれへと集中していったと言えよう。しかも彼自らが，ただ単に「哲学すること」に集中するのみならず，さらにそれを万人に要求するために哲学研究へと転じる決断を下したと言われる。したがって「哲学すること」が，彼の精神生活上さらには後の哲学研究上いかに重要な要であったかが窺い知れよう。

さらに小倉や林田は，精神病理学研究時代におけるヴェーバー，フッサールとの出会いの重要性を指摘している。草薙も，ヤスパースが1913年に哲学部心理学講師となり，フッサール，ディルタイ，ヴェーバーから主として研究方法上の影響を受ける中で研究目標を明確にしていったと言う。その目標とは，すなわち「我々

は何を知るか」,「何によって，またいかにして知るか」,「我々に知られないものは何か」などを論じることである。草薙によれば，彼はある一つの研究可能な対象がいかなる仕方で現象するかを洞察する方法論的課題に取り組んでいく。しかもそこにおいては，あらゆる方法は彼にとって実際的な認識をもたらさないかぎり意義をもたない。つまり彼は，ここにおいても現実を読み解くことを主眼としているというわけだ。彼は，そのような学的出会いに影響を受けつつ方法論的課題に取り組む中で，その哲学上の成果を『世界観の心理学』として世に出すにいたった。したがってこの書こそが，諸説において哲学への道を切り拓いた哲学上の根本的な問いを含むヤスパース哲学最初の著作でありその出発点とされるのである。

しかしその一方において諸説によれば，ヤスパースは1919年の『世界観の心理学』を待たずとも，それ以前のギムナジウム時代，精神医学研究時代の実生活の中において，哲学的な実存体験や出会いを契機にして哲学的精神に目覚めていた。また彼の当時の精神医学研究は，フッサール，ディルタイ，ヴェーバーから方法論的影響を受けている。したがって研究にも哲学的要素があったと言える。しかし彼の精神生活と精神医学研究にある哲学的内容は，その後の彼の哲学へとつながっていく具体的な哲学的内容とは異なる。したがってむしろその後1913年にキルケゴールから受けた哲学的衝撃が，彼を哲学研究へと目覚めさせ，1919年に著した『世界観の心理学』において独自の哲学的内容を初めて開花させ，それへの哲学的評価が哲学研究への転じを可能にしたと諸説は考える。つまり1913年のキルケゴール体験こそが，その後の哲学へと発展していくヤスパース哲学構築へと彼を動かした原動力の源であったと言う。またその後の彼の哲学に発展していく主要な哲学的内容は『世界観の心理学』において初めて明確に打ち出されたと言う。つまり小倉が引用するように，彼は心理学研究時代の「私の心理学は私の意識しないうちに広い範囲にわたって，私が後に『実存開明』と名づけたものの性格を受け入れた。この心理学はもはや単に事実と出来事の規則との経験的な確認ではなく霊魂の諸可能性の企画であり，これらの可能性は鏡に映すように，人間は何でありうるのか，人間に何ができるか，人間はどこへ到りうるか，これを示すものである。かかる洞察は，私が本来的に意志するものを内的行為において選択するための自由への訴えかけを意味している」[48] と言う通りだ。したがって諸説は，ギムナジウム時代，精神医学研究時代にある彼の精神生活がいかに哲学的であったかを見出そうとも，研究上はあくまでもキルケゴール体験において学的な哲学研究に目覚め始動され，『世界観の心理学』において初めて彼の哲学が学的に現れたと捉えるのだ。

たとえばギムナジウム時代のヤスパースの衝撃的体験を語った重田でさえも，そのすぐ後の精神医学研究時代にその体験に即した何か実存哲学に通じる研究要素を見つけ出すことはしない。重田は，確かに哲学者や文学者らが彼の初期の精神病理学論文中に登場することでその豊かな精神領域を窺い知ると述べてはいる。またなるほど重田の言うように，彼の日記や手紙から哲学的記述を読み取ることはできるであろう。しかしそれは，彼の精神生活上にある哲学的要素に過ぎず，学問上・研究上哲学的に論じられているわけではないのだ。したがって前述通り重田は，精神医学研究時代の主著『精神病理学総論』について4ページにわたり解説しながらも，その中で肝心の実存哲学への萌芽を微塵も確認しないのだ。

以上から確かに先に指摘した伴の「初期(一)

48）小倉志祥・山本信他，前掲書，11ページ。
【RuA, S. 334-335.（邦訳「私の哲学について」23ページ)。】
＊注28に，邦訳本の和訳あり。

精神病理学の時期」は「哲学以前の段階」であり，『世界観の心理学』を著した「初期（二）心理学の教員の時期」こそが「哲学活動の上では，これが初期の模索的な始動の時期」だという捉え方は，これまでの諸説に沿ったものだと言えよう。またさらにはそのような著名な学者，さらには辞書にあってもその説で一致している故に，これこそが「通説」であると言えよう。

Ⅲ　諸説と自説「人間学的構想」の比較再検討

諸説は，以上の「通説」に立つが故に当然彼の精神医学研究に対して無関心である。諸説は，彼の哲学を考察する上では，彼の精神医学を軽視・無視し，その考察の必要性を全く感じていないように思われる。また哲学者転身後の彼の精神医学研究にも無関心だ。つまりヤスパースは驚くべきことに哲学研究に転じた後も精神医学研究特に精神病理学研究を哲学研究と共に継続していった。彼は，精神医学研究時代1913年に著した『精神病理学総論』をその後生涯にわたって改訂していくのだ（資料②「自説によるヤスパース年表」参照）。したがって本稿でも便宜上哲学研究時代としてきた中期や後期にあっても，彼は間違いなく精神病理学研究を哲学研究と並行して行っていたわけだ。

ただし先に考察したように，宇都宮や林田の論において，この「初期（一）精神病理学の時期」に，すでにヤスパースは人間存在解明を目指していたこと，またその中で科学の限界と哲学の必要性を感じていたことが指摘されている。この指摘は注目に値し，自説にとり重要である。つまり宇都宮は，精神医学研究時代に彼はその研究上「人間とは何か」に取り組まざるを得なかったのであり，もし彼が精神病理学という人間存在に密着した科学の道を選ばなかったら，後日の哲学者ヤスパースは存在しなかったと考える。精神病理学者は，その研究の最後には人間とは何かという哲学的な問いに取り組まざるをえないからだと述べている。したがって草薙の言うように，彼は精神医学研究時代にただ単に「我々は何を知るのか」とある一つの研究可能な対象がいかなる仕方で現象するかを洞察する方法論的課題に取り組んだのではない。彼は，認識主体である我々自身であるところの人間そのものを問うところに身を置き集中していったのだ。また林田の言うように，彼の精神医学研究におけるその人間存在解明への集中が科学の限界を明らかにすることとなった。その点宇都宮は，彼が『精神病理学総論』の中で人間について一つの全体像を与えるような科学的理論を拒否したことは，心理学研究時代以前の精神病理学研究時代にすでに哲学的精神に目ざめていたことを意味しようと言っている。したがって宇都宮と林田の論に従えば，ヤスパースは，精神医学研究時代に人間解明を目指し，そこにおいて科学の限界を悟ることによって，心理学研究時代にさらに哲学研究へと向かうことになったと言えよう。

以上の論には，「人間学的構想」に最初から立つヤスパースの学的歩みという自説にある視点が欠けてはいるが，それへの肯定的な材料がそこに見出されよう。また海外の研究者は，彼の転じの歩みの成り行きを考察する際，そこから何らかの決定的な原因や動機を論じようとはしない。しかし私はこの転じの真相を考察することにおいてこそ彼の哲学の特徴がより明確になると考える。したがって次に拙稿「カール・ヤスパースと人間学的構想」[49] で考察した私の言う「人間学的構想」にあるヤスパースの学的歩みと諸説とをさらに比較検討してみたい。

ザーナー著『ヤスパース』によれば，ヤスパースは，学生時代「自分の専門分野は人間であり，他の何ものに対しても私は，能力も興味も持続

49）桝井，前掲論文，38-59ページ。

的にはもたぬであろう」[50] と言う。人間を問う以外の研究には能力も興味もないと彼は言い切るのだ。また医学部へ進学する学生の動機は人それぞれであろうが，彼の場合『哲学的自伝』の中で，「哲学的な動機から医学や精神病理学を選んだ」[51] と自ら語っている。したがって私は，彼の研究は，専門分野がいずれに属していようとも，哲学的な動機からあくまで何よりもまず人間存在解明に集中していると考えた。彼には，精神医学研究を選び，没頭するその以前からすでに「人間とは何か」という哲学的問いがその研究の中心的動機として存在していたのだ。彼は，先の引用にあるようにそもそも人間に対する哲学的関心から医学，さらにその中でも精神医学研究を専攻した。しかも草薙が言うようにヤスパースが「何よりも重大視したことは，現実を経験し，知るということであった」[52]。したがってヤスパースが，常に実際的な問題に向かう以上，そこに生きている人間存在を実際に法学さらに医学の中で問う道を最初に選んだことは理解できる。しかもそこまで切に彼は，人間存在解明を求め，その大風呂敷の構想に立てばこそ，ハイデルベルク大学精神科クリニックにおいて精神医学者，精神科医として，西洋医学の観点から研究と臨床の現場に身を置きつつも，なおも機械論的な医学に縛られることなく，独自に哲学的問題意識に満ち溢れ，「人間とは何か」，「人間はどう捉えうるのか」といった場違いな哲学的問いにこだわることができたのだ。そして林田の指摘通り科学的立場に立ち，人間を「もの」として機械論的に捉える身体医学としての精神医学，脳医学からはどうしても人間存在は汲みつくせないということに身をもってぶち当たり，その限界にどうしようもないジレンマを抱え込むこととなった。だからこそ彼は，精神医学ひいては科学が人間をどう捉えどう解明しうるのかその可能性と限界を見極め，さらなる人間存在解明の方法論を追究しようと精神医学の中でもさらに精神病理学に研究を絞り，そこでフッサールの現象学も自分なりにだが援用し補完的に取り入れ学際的に研究を進めるにいたったのだ。したがって宇都宮は，前述の通り「同じ科学の道を歩むにしても，もしヤスパースが精神病理学という人間存在に密着した科学の道を選ばなかったら，後日の哲学者ヤスパースは存在しなかったかもしれない」[53] と言うが，元々精神医学研究と哲学研究という全く異なる専門領域でありながらも，彼にある「人間存在解明」の研究においては，「人間を問う」という共通テーマの下で，その解明のための諸研究が同時並行的・相関的に行われる，つまり学際的であらざるを得ないところに彼自身が身を置いていた。つまり彼は，たまたま自分の専門となった精神病理学研究上の必要から消極的にまた成り行きで人間そのものを問うところに身を置き集中したのではない。彼は，最初から人間存在解明を目的とする「人間学的構想」に立つが故に，精神医学の中でも精神病理学研究を自ら積極的に選び取ったと私は考えるのである。つまり彼は，初めから人間存在解明を第一に目指し哲学し研究するが故に，まずは精神医学を選び取ったとは言え，その可能性を研究分野に縛られることなく無制限に探る中で，さらに精神病理学，心理学，哲学へと研究の幅を拡大し研究分野自体を転じつつその解明に集中していったのである。つまり第Ⅰ部で考察したように私は諸説よりもさらに積

50）ザーナーは，ヤスパースの言葉として，「自分の専門分野は人間であり，他の何ものに対しても私は，能力も興味も持続的にはもたぬであろう」（JASPERS Briefe I）【Hans Saner, *Jaspers*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch, 1970, S. 22.（重田英世訳『ヤスパース』理想社，1973年，25ページ）。】を引用している。

51）PA, S. 30.（邦訳41ページ）。

52）草薙，前掲書，16ページ。

53）宇都宮，前掲書，39ページ。

極的に何よりも人間そのものをまず問うこと，人間存在解明こそが，彼の前期，中期，後期の研究の歩み全体を貫く重要なテーマであったと考えるわけだ。彼が精神医学，精神病理学，心理学，哲学へと研究分野を広げ転じていったその歩み全体を支え，導いたのは，何よりも彼にある人間存在解明への意志であって，それに基づき次第に研究が独自に自己啓蒙的展開を遂げ，哲学的に深められていく中，哲学者転身への道をも開いていったと考えるのだ。ではヤスパースは，なぜそこまで切に，人間を問うまでにいたったのであろうか。それは，諸説で論じられている通り，彼がギムナジウム時代から精神医学研究時代までの日常生活の中で限界状況と実存の実体験さらに哲学的な出会いを経験し私生活上で人間を問う「哲学すること」の重要性が日々強まっていく中で，それがそのまま研究に直接持ち込まれ問題とされていったからであろう。

以上のように諸説と重ね合わせ考察しても，自説にある彼の研究の歩みは何よりもまずこの人間存在解明を目指す「人間学的構想」に支えられ導かれたものだという見方は，突拍子もないものではない。むしろ以上の彼の歩みに対する諸説の説明にこの構想理解を加えると，なぜ精神医学者ヤスパースが新たに哲学者へと転身したかについてより一層明確になるのではないだろうか。したがってここからもこの人間存在解明を主眼とする「人間学的構想」こそが，彼の学的歩み全体を解く大きな鍵だと考えられよう。やはりこの「人間学的構想」という観点からこそ，彼の転身，そしてひいては彼の歩み全体が理解されるのだ。

したがってここで自説を通説と照らし合わせると，ヤスパースの歩みにおいて伴の言葉を借りるならば「哲学活動の上では，これが初期の模索的な始動の時期に相当する」のは，伴の言うように『世界観の心理学』を著す「初期」の「心理学教員の時期」ではない。その前の「初期」の「精神病理学の時期」ということになる。その時期からすでに「人間学的構想」に基づき哲学し，さらにそこで確信した科学の限界から哲学へと転じ自己啓蒙的展開の内に独自の哲学を構築していったのだ。すなわち私は，彼の歩みを以下の「自説によるヤスパース年表」のように区分して考えるわけである（資料②「自説によるヤスパース年表」参照）。この哲学上の模索時期に，実際に「人間学的構想」に立ち「人間とは何か」を問い哲学し，科学の限界と哲学の必要性を見出していくようなところに身を置いていたのかの検証は次に譲るが，ここにおいてこそ，諸説では看過されている彼の精神医学研究時代とその後の哲学研究時代との哲学的つながりと転じの内実が明確になってくるからである。

資料②　自説によるヤスパース年表　【人間学的構想に基づく精神医学的哲学者ヤスパースの歩み】

〔1〕【学生時代】精神医学研究へといたる時期（1902年～1909年）
1902年，大学時代，ジルス・マリーアにおいて，法学から医学へ移ることを決意する
1905年，医師予備試験合格（ゲッチンゲンで，総評は「きわめて優」）
1907年，伴侶となるゲルトルート・マイヤーと出会う
1907年～1908年，医師国家試験合格（ハイデルベルクで，優の評価で）
1908年～1909年，ハイデルベルク大学精神科クリニックにて医学実習生となる
ハイデルベルク大学内科クリニック神経系疾患部門で半年間研修する
1909年2月，医師開業資格を授与される
1909年　医学博士学位を授与される
博士論文『郷愁と犯罪』を著す

〔2〕【前期ヤスパース】精神医学・精神病理学における「人間存在解明」の方法論的模索の時期（1909年～1920年）
①精神医学研究の時期（1909年～1913年）
1909年～1915年，ハイデルベルク大学精神科クリニックの無給助手となる
1909年　ヤスパースは，医師仲間，グルーレが催す会合にてマックス・ヴェーバーとの運命的な出会いを経験
1910年　ゲルトルート・マイヤーと結婚する
1913年　『精神病理学総論』（初版）出版
ハイデルベルク大学哲学部ヴィンデルバントにより心理学の教授資格が授与される（12月）
グライフスヴァルト大学，キール大学からの招聘を辞退する
フッサールからゲッティンゲンの自宅に招待され現象学者として認められる
キルケゴールを初めて読む
②心理学研究の時期（1914年～1919年）
1914年キルケゴール研究を開始
1914年～1916年ハイデルベルク大学哲学部の心理学講師就任
1916年～1920年ハイデルベルク大学哲学部の心理学員外教授就任
1919年　『世界観の心理学』を著す
『精神病理学総論』（第二版）出版
この頃，ハイデッガーと知り合う

〔3〕【中期ヤスパース】哲学における「人間存在解明」の哲学的方法論構築の時期（1920年～1932年）
1920年　マックス・ヴェーバー他界
それを一つの契機に哲学科に移籍
1920年　ハイデルベルク大学哲学部の哲学助教授に就任
1922年　ハイデルベルク大学哲学部の哲学正教授に就任
『精神病理学総論』（第三版）出版
1928年　ボン大学からの招聘を謝絶
1931年　『現代の精神的状況』を著す
1932年　主著『哲学』（三巻）を著す

〔4〕【後期ヤスパース】哲学における「人間存在解明」の哲学的方法論完成の時期（1933年～1969年）
1935年　『理性と実存』を著す
1937年　国家社会主義ドイツ労働者党により教職を剥奪される
1945年戦後，アメリカ占領軍当局の同意下に復職
1946年　『精神病理学総論』（第四版）出版
（その内容が，二倍になるほど大きく書き改められた。
1942年の出版が許可されず，この年に出版）
1947年　『真理について』を著す
1948年　バーゼル大学の招聘に応じ，哲学正教授就任
『精神病理学総論』（第五版）出版
1953年　『精神病理学総論』（第六版）出版
（その内容は，第五版と同じ）
1959年　『精神病理学総論』（第七版）出版
（その内容は，第五版と同じだが，新たな序論が書き加えられている）
1962年　『啓示に面しての哲学的信仰』が出版される
1965年　『精神病理学総論』（第八版）出版
1969年　他界する
1973年　『精神病理学総論』（第九版）出版